

C・カルパンティエ『初等教育修了証書の歴史』

飯田, 伸二

<https://doi.org/10.15017/10049>

出版情報 : Stella. 20, pp.161-168, 2001-09-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

Cl・カルパンチエ『初等教育修了証書の歴史』

飯 田 伸 二

周知のようにフランスは世界に冠たる学歴社会である。だが意外なことに学歴社会を語るうえで不可欠の試験・コンクールにかんする研究は少ない。管見によれば1990年代に入るまで本格的なモノグラフィーといえば、1937年に出版されたバカロレアにかんする著作だけだったのである¹⁾。しかしながら最近になってようやく状況に変化が生じた。フランスにおける「学校」・「教育」の深刻な機能麻痺を背景に、教育史とりわけ「科目史」・「試験史」分野の研究は近年目覚ましい進展を遂げている。文学研究者にとっても興味深い業績が少なくない。

まず1993年に19世紀フランス語・文学教育史の大家アンドレ・シェルヴェルがアグレガシオンの歴史を扱ったモノグラフィーを世に問うた。次いで1999年には同じ著者が『アグレガシオンからバカロレアまでの主要試験・コンクールにおける19世紀のフランス語小論文』を発表した²⁾。後者は、対象をフランス語小論文に限定しているとはいえ、19世紀の学校文化で〈文学〉が果たしてきた決定的な重要性を物語る貴重な資料集である。また高等師範学校ユルム校の入学試験にかんしては、『高等師範学校200周年』および『師範学校の古典学』が、19世紀から20世紀初頭にかけて同校で実施された入学試験のあり方について貴重な情報を提供してくれる。さらに時代が進んで世界大戦間については、シルネリの実績『知識人世代』を忘れることは許されまい。このように試験・コンクールにかんする研究は、バカロレア、高等師範学校ユルム校の入学試験、アグレガシオンといったエリート養成制度への関心を軸に急速な発展を見せているのである³⁾。

さらにこれまではエリートの選抜・教育に偏っていた研究動向を是正する形で、1990年代後半から初等教育修了証書（以下「証書」）に関連する研究にも注目すべき成果があがっている⁴⁾。そのひとつが本稿で取りあげるクロード・

カルパンチエ著『初等教育修了証書の歴史——ソム県における公式文章と実施状況（1880-1955年）』である⁵⁾。

タイトルが示すようにカルパンチエは、いくつかの例外をのぞけば調査対象をもっぱらソム県に限定している。これは、初等教育修了試験（以下「修了試験」）実施の大枠（試験科目、時間、受験資格など）は国が定めるものの、実施の責任は各県がになっていたという事情に由来する。だが彼はソム県で得られた調査結果の有効性はあくまでローカルなレベルに留まり、フランス全土に応用不可能と考えているわけではない。むしろソム県で確認できる受験者の増減、合格率、合格者の出身社会階層、男女比などの変遷から読みとれる方向性は、各県の事情による若干の偏差を超えて国全体の傾向を示唆するという仮説を研究の出発点に据えている。

本書は全7章からなる。社会学的視点が濃厚な研究であり、各章が提供する学問的興味は文学研究に携わる者にとって一様ではない。とりわけ後半の4章は議論の基盤をソム県あるいは、同県県庁所在地アミアンとその郊外の細かい資料調査に据えている点で、文学研究へ直接利用できる情報はきわめて限られている。以上の点を斟酌しながら各章の主旨を簡単に紹介しよう。

第1章では「証書」がになうべき価値が議論の対象となる。そもそも「証書」は、とりわけ農村部の児童の就学率をあげるために第2帝政下に創設された。第3共和政の下で初等教育の義務化・無償化が実現したのにともない、「証書」の民主化を押し進めるべきか、それとも一部の成績優秀者に固有のものとするべきかが社会的な議論の争点になった。これにかんして国・県・教育関係者・産業界が19世紀の後半から1940年にかけて提出した見解の紹介・分析が章の論述の柱になっている。カルパンチエは初等教育の根本的改革者フェリーが「証書」は「標準的な知性を持ち、標準的な教育を受けたことの証明」でしかないと考え、「証書」の一般への拡大を目指していた事実を喚起する。その一方で、彼は「証書」が児童のあいだに実際に定着＝民主化するのはようやく1930年代になってからである点を論証している。

第1章のテーマには教育システム全体のなかで「証書」が占める地位の確定作業が含まれる。この課題に応えたのが続く第2章である。いわゆるフェリー改革は初等教育ばかりでなく、中等・高等教育の民主化も推し進めた。この改革により、アンシアン・レジーム以来初等教育を修めた児童が中等教育に進む

のを阻んできた障害がわずかながら緩和されたのである。20世紀前半に中等教育の民主化が進むなか、議論の対象となったのが「修了試験」の受験年齢である。カルパンチエは初等教育と中等教育の関連を視野に入れながら、この問題を論じている。小学児童が中学校初等科出身の子供たちと同年齢で中学に進学するには11才で中学第6学年に進学する必要があった。だが当時の初等教育修了年齢は13才である。「修了試験」の年齢を低く設定すれば、優秀な児童の多くが修了年齢に達する前に小学校を離れる恐れがある。また受験年齢を引き上げても優秀な児童が小学校に残る保証はなく、かえって「証書」のレベルをさげる危険ばかりが増大する。実際には「証書」が歩んだ道はカルパンチエの言葉を借りれば「民主化」の道である。つまり「証書」は初等教育のエリート層から、修了年齢まで小学校に通った児童全体へとその対象を広めていった。この傾向に対応し「修了試験」の受験年齢は引き上げられる。19世紀末から20世紀初頭にかけては11才以上と12才以上のあいだで受験年齢がゆれていたが、1910年から第3共和政末期までは細かい修正を伴いながら12才以上に設定されるのである。

第3章は「証書」の民主化と初等教育および中等教育の関係を試験問題の内容・難易度から検討している。ここで著者は試験で「フランス語」、とりわけ受験生の「綴り」能力を見極めるための「聞き取り」が担ってきた重要性に注目する。とりわけ「証書」の誕生当初から「聞き取り」が可否に与えてきた決定的な影響力は徐々に緩和され、1917年の改革により「聞き取り」の一定のレベルを保ちながら、他の科目（算数、歴史など）との均衡に配慮した科目編成・採点方法が構築されていった経緯を公式文章の分析を通して追跡している。とりわけ1917年の改革には、カルパンチエは「受験者を増やす」という当局の意図が大きく働いていたのではないかと推論している。

論述のスタイルは第4章以降大きく変化する。第3章までは公的文章、専門雑誌に発表された関係者の証言の分析を踏まえた、いわば制度論的な議論が中心であった。これ以後は統計の分析に基づいた社会学的アプローチが柱となる。まず第4章では「証書」が児童・教員に与える影響およびその変遷が取りあげられている。ここでわれわれの関心を引くのは、カルパンチエが1930年代中盤（とりわけ1933年から1935年にかけて）を「証書」の性格が決定的に変容した時期と捉えている点である。試験の成績を詳細に吟味した著者によれ

ば、この時期を境にそれまでは小学校に留まっていた優秀な児童が「修了試験」を待たずに中学校の第6学級へ進むようになり、「証書」は優良児童の徴としての機能を失ってしまう。その理由として彼は特に経済危機と中等教育の無償化をあげている。

第5章では学校の立地条件、保護者の社会的帰属、児童の性別・年齢といった観点から「証書」獲得に有利に働くファクターが解明される。第6章および第7章は「証書」の社会的機能を問題にしている。まず第6章でカルパンチエは、「証書」取得者の進路、彼らの最終的な職業を調査し、「証書」のいわば社会的収益力を計ろうとしている。また第7章では児童の出身階層にとって「証書」がどのような意味をもつのかを解明すべく、とりわけアミアンおよびその近郊にフィールドを絞って、階層・職業別に「証書」の取得率、その後の進路が詳細に調査されている。

すでに指摘したようにカルパンチエは制度論的・社会学的視点に立っている。それゆえ彼は「修了試験」に出題された個々の問題を調査の対象から外している。これについては、第3共和政から第4共和政にかけての初等教育で〈文学〉が果たしてきた役割を具体的に把握・理解しようと期待する読者の失望は小さくないだろう。にもかかわらず本書が文学研究者にとって一読に値するのは、公式文章・実証的データに依拠しながら第3共和政の〈神話〉のひとつに祭り上げられた「証書」が果たした歴史的役割を多角的に論じているからである。

じじつカルパンチエの研究により、読者は第3共和政の「学校」・「教育」を扱った作品により微妙な奥行き・陰影を読みとる視点を得た。本書評を締めくくりに当たり、こうした読みの可能性をセリーヌの『なしくずしの死』に探って素描しておきたい。

この作品では主人公フェルディナンが「修了試験」に挑む一節がある。その場面を紹介しよう⁶⁾。試験の朝、どこの母親もわずかなりともわが子を力づけようと試験会場につめかける。試験は小学校に通う児童とその両親にとり最も「厳粛な瞬間」であるからだ。しかし母親連の力の入れようとは裏腹に子供たちの出来は無惨である。試験第2部の口頭試問では「子どもたちは、みんな質問の度に間違えた」。「あらゆる子に代わって答えていた」のは当の試験官である。もちろんフェルディナンもその例に漏れない――

まるで白痴のグループだった……母親たちは次第にまっ赤になっていった……子供たちにとっちゃあゴマンの平手打ちほどの脅威だった……室内には大虐殺の匂いがした……とうとう全部の子が終わった……あとは合格発表を待つばかりだった……それこそ奇跡中の奇跡だった！……とうとう全員が合格したのだ！⁷⁾

緊張する親の前で、無知ぶりを露呈するばかりの子供たち、彼らの学習レベルを十分に承知していながら、あえて全員合格にする学区の視学監。ここでは機能麻痺をきたし、その「厳粛」な外観だけがかろうじて残る制度の虚無が暴きだされている。

『なしくずしの死』の出版は1936年である。「証書」の社会的機能の変遷と関連づければ、まさしく「証書」が初等教育のエリートから、初等教育を受けた児童全体に広く開かれはじめた時期と一致する。だが小説のなかで主人公フェルディナンが小学校に入学するのは1900年のパリ万博からしばらくしてのことである（しかも入学前には基本的な「読み」の力と数を身につけていた）。それゆえ彼が受験したのはおそらく1900年代半ばということになる。つまり「証書」がまだその威光を保っていた時代である。またセリーヌは「修了試験」の受験条件については何も語っていない。児童が「証書」を手に入れることは教師にとっても名誉であった。じじつカルパンチエの研究によれば「修了試験」の合格者数は教師の異動・昇進では有利に働く客観的なファクターであった。それゆえ教師は受験する児童を厳正に選別していた。合格する見込みのない児童は受験すらさせてもらえなかったのである。すでに19世紀後半から合格率がかなり高かった理由もここにある（カルパンチエの調査によれば年ごとに大きなばらつきはあるが低くとも55%、高い年には80%に達した）。つまり『なしくずしの死』は、「証書」の歴史の変遷をあえて無視して、「修了試験」を意図的に嘲弄しているのだ。

「修了試験」の一節は、おそらく作品全体のエコノミーと通底している。『なしくずしの死』はベル・エポックの華やかさが隠しもっていた暗部を執拗に抉りだす。その攻撃対象のひとつが「教育」にほかならない。家庭・学校・寄宿舎・職場などで行われる教育は欲望と金が支配する実社会では何の役にも立たない。このテーゼに小説はくり返し立ちもどる。とりわけ厳しい揶揄の標的にされるのが「学校」である。20世紀初頭の労働市場では絶大な力を発揮したはずの「証書」を持ちながらフェルディナンは何度も職を失う。イギリスの寄

宿学校にも滞在するが、そこで彼は決して何も学ばないという決意を終始守り抜く。結局彼が仕事にありつくのは、独学で発明雑誌「ジェントロン」の発行人兼編集者になったクールシアルの下である。小説のクライマックスでこの発明狂は破産からの起死回生を目論みパリ郊外に開拓団を結成するが、極貧生活を送る彼には集まった子供たちを教育する物理的余裕はない。だが作品中子供が生き生きと生活し、たくましく成長する場所が唯一この開拓団にほかならないのだ。「教育」にかんするさまざまなエピソードの締めくくりがこの非＝教育的な開拓団の肯定的側面であることは、『なしくずしの死』における「学校」攻撃の徹底ぶりを物語る証にほかなるまい。

また作品において最も惨めで最も嫌悪感を催させる人物が、最も高学歴で教養ある人物、つまりフェルディナンの父オーギュストであるのも示唆的である。じじつフェルディナンが彼の逆鱗に触れる度に彼の口から溢れだすのは、当時のエリート教育の徴ともいえるラテン的教養である――

僕はローマ人のモラルによって、ケケロによって、全ローマ帝国、全古代ローマのすべてによって唾棄された。⁸⁾

しかし中等教育で授かった教養にもかかわらず、オーギュストは保険会社からいつ解雇されるのかと戦々恐々とする平社員でしかない。しかも「〈モダン〉な教育」⁹⁾ つまり外国語とフランス語中心の教育を受け、ラテン語をほとんど知らぬまま大学にまで進んだ若い社員たちからは、格好のいじめの標的にされる有り様である。父親は19世紀の高校で古典教育を受け、またその息子は20世紀初頭に「証書」獲得した。この2つは共に学歴の点からすれば社会化の最良の保証にほかなるまい。だがこの親子はいずれもこの貴重な教育資本を生かすことができず、社会の現実に押しつぶされる。作品のタイトルが告知するように、セリーヌの小説世界では教育を通じた社会化への努力は常に回収不能なのである。

「修了試験」の実態と「証書」の価値の変遷を小説世界と突き合わせることは、現実と文学のあいだに本来は存在しないはずの対応関係を不用意に築く危険をおかすことかもしれない。しかしセリーヌの初期作品は、作者が生きた社会ばかりでなく、社会化のプロセスそのものに立ち向かっている以上、テキスト自体が社会史・文化史的な読みを要請していると考えられるが、作品に対す

るいっそう忠実なアプローチなのではあるまいか。いずれにせよ第3共和政とは、教育をテーマとする小説が多く書かれ、また地方文学が大きなブームとなるなか、地方在住の小学校教師がしばしば自作を世に問うた時代である¹⁰⁾。つまり学校という〈社会化〉の場所がさまざまな経路を通じ文学と結びついていた時代なのである。カルパンチエのように小学校の実態を多角的に解明しようとする研究は、近代フランス文学の読みに驚きに満ちた発見をもたらしてくれるにちがいない。

註

- 1) Jean-Baptiste PIOBETTA, *Le Baccalauréat*, Paris : Jean-Baptiste Ballière, 1937, 1048 pp.
- 2) André CHERVEL, *Histoire de l'agrégation. Contribution à l'histoire de la culture scolaire*, coll. «Sens de l'histoire», Paris: Institut national de recherche pédagogique / Éd. Kimé, 1993, 296 pp.; *La Composition française au XIX^e siècle dans les principaux concours et examens de l'agrégation au baccalauréat*, Paris: Vuibert / Institut national de recherche pédagogique, 1999, 592 pp.
- 3) *École normale supérieure. Le livre du bicentenaire* / publié sous la direction de Jean-François SIRINELLI, Paris : PUF, 1994, 457 pp. ; Pascale HUMMEL, *Humanités normaliennes. L'enseignement classique et l'érudition philologique dans l'École normale supérieure du XIX^e siècle*, Paris: Les Belles Lettres, coll. «Études anciennes», 1994, 299 pp.; Jean-François SIRINELLI, *Génération intellectuelle. Khagheux et normaliens dans l'entre-deux-guerres*, Paris: Fayard, 1988, 721 pp.
- 4) この点にかんしては以下を参照——Philippe SAVOIE, «Quelle histoire pour le certificat d'études?», *Histoire de l'éducation*, n° 85, janvier 2000, pp. 49-72.
- 5) Claude CARPENTIER, *Histoire du certificat d'études primaires. Textes officiels et mise en œuvre dans le département de la Somme (1880-1955)*, Paris: L'Harmattan, coll. «Bibliothèque de l'éducation», 1996, 336 pp.
- 6) ちなみに人気女優で、セリーヌとも親しい関係にあったアルレッティがこの一節を朗読した録音が残されている。『なしくずしの死』の数あるエピソードのなかで特にこの場面が選ばれていることから、当時の一般大衆にとって「証書」がいかに大きな重要性をもっていたかがうかがえる。
- 7) Louis-Ferdinand CÉLINE, *Mort à crédit*, in *Romans I*, Paris: Gallimard, coll.

«Bibliothèque de la Pléiade», 1962, p. 633. 引用にあたっては高坂和彦による邦訳『なしくずしの死』（国書刊行会, 1991-95年）を参照した。

8) *Ibid.*, p. 690.

9) *Ibid.*, p. 762.

10) Anne-Marie THIESSE, *Écrire la France. Le mouvement littéraire régional de langue française entre la Belle époque et la Libération*, Paris: PUF, coll. «Éthnologies», 1991, 318 pp.; Jean-François CHANET, *L'École républicaine et les petites patries*, Paris: Aubier, coll. «Histoires», 1994, 432 pp.